

29 高度救命救急センター開設後の、当院における高気圧酸素治療の現状：開設前との比較

野村亮介¹⁾ 佐藤敏幸²⁾ 佐々木淳一¹⁾
篠澤洋太郎¹⁾

- 1) 東北大学病院高度救命救急センター
- 2) 東北大学病院診療技術部

【背景および目的】平成18年10月に当院では新病棟オープンに伴い、高度救命救急センターを附設した。当院では、第2種高気圧酸素治療装置を有しているが、高度救命救急センターの開設により、その治療回数や適応疾患の動向に変化があったかどうかを調査した。

【対象および方法】救命救急センター開設前後の4年間に当院で高気圧酸素治療を行った患者をA群(平成16年10月～18年9月)とB群(平成18年10月～平成20年7月)に分けて、患者数と適応疾患の分析を行った。

【結果】4年間での高気圧酸素治療患者総数は159名、総施行回数は2180回であった。内訳はA群；74名(男41名、女33名、平均年齢52.5±19.3歳)、1302回、B群；85名(男64名、女21名、平均年齢51.2±17歳)、878回であった。救急部(救急センター)はA群；8%(6例)、B群；61%(52例)の症例を担当した。適応疾患別では、A群；突発性難聴24例、骨髄炎14例、放射線障害12例、網膜中心動脈閉塞症7例、一酸化炭素中毒4例、減圧症1例、その他12例に対し、B群；一酸化炭素中毒35例、突発性難聴12例、骨髄炎7例、放射線障害7例、減圧症6例、軟部組織感染・損傷8例であった。診療保険点数はA群；818,400点/2年で1回当たり629点、B群；1,405,400点/2年で1回当たり1601点だった。

【考察】救命救急センター開設により、救急センターによる高気圧酸素治療が増加した。適応疾患は救急的な疾患にシフトし、診療保険点数が増加した。一酸化炭素中毒については診療プロトコールを作成し、高気圧酸素治療の適応を明確にしたため、施行回数が増加した。

30 戦略的手法を採り入れた治療件数増加

天野陽一¹⁾ 間中泰弘¹⁾ 藤田智一¹⁾
浅野良夫²⁾

- 1) 医療法人豊田会 刈谷豊田総合病院 臨床工学科
- 2) 医療法人豊田会 刈谷豊田総合病院 脳神経外科

当院における高気圧酸素治療の現状は数年前より、各科からの依頼減少による治療件数の伸び悩み、また採算との兼ね合い等により悪循環が発生し減少傾向であった。この傾向は近隣病院でも同様であり、我々高気圧酸素治療に携わる技士としても緊急課題である。

これら外部・内部環境への対策に有効な方法として、現在多くの企業が経営戦略への分析ツールとしてS W O T分析を用いている。今回我々は、その現状を解決するため、このツールを採り入れ分析することによって対策方法が明確となった。また、スタッフ間においても自部署での共通問題として捉えられるようになり、対策手段が共通認識として意識向上につながった。これら問題点に対して短期・中期計画を策定し実施した。その結果、各科からの認知度が向上し、新規治療依頼の増加および治療件数増加に繋がったのでここに報告する。